

一七〇九年イエズス会士レジスの沿海地方調査

松 浦 茂

【要約】 一七〇九年に清の康熙帝は、新しい中国本土と周辺地域の地図（『皇輿全覽図』）を製作するために、レジスらイエズス会士の調査隊を、東北地区とアムール下流地方に派遣した。一行はニンゲタから、直接アムール方面に向かわず、沿海地方（沿海州）の南部を迂回して、測量を行ないながらアムール川の下流へと向かった。その結果かれらは時期を逸して、寒気のために前進できなくなり、アムール川河口の手前で引き返すことになった。

わたしは、レジスらがわざわざ沿海地方に入った理由は、ヨーロッパで論争のあつたエゾ問題を解明することにあつたと考える。当時エゾ（北海道）は、大陸の一部かそれとも独立の島かで、見解が分かれていたが、どちらの説もエゾが朝鮮の東北付近、あるいは本州の北方にあるという点では一致していた。そこでレジスは自ら朝鮮の東北部まで出かけて、そこがエゾであるかどうかを確かめようとしたのである。この調査においてレジスは、沿海地方の周辺にアイヌの存在を確認できなかったため、沿海地方はエゾではなく、エゾは日本に近い島であると結論した。

レジスらの調査は、エゾ研究の転換点となり、それ以来エゾを大陸の一部と考える仮説は退潮して、島であるという説が有力になった。

史林 八四巻三号 二〇〇一年五月

はじめに

周知のように清の康熙帝は、後の『皇輿全覽図』を製作する一環として、一七〇九年にイエズス会士レジスらを東北地

区に派遣した。このときレジスらは、東北地区から沿海地方、さらにはアムール下流地方まで踏破して、各地において測量を実施した。二年後に康熙帝はさらに満洲人の調査隊を派遣して、レジスらが到達できなかったアムール河口とサハリンを調査させて、東北アジア地域の測量をほぼ完了したのである。学界の通説ではこのときに達成された最大の成果は、サハリンの存在を確かめたことであるといわれる。しかしわたしは、それは副次的な成果であつて、レジスらが敢行した調査の目的とその成果は、別のところにあつたと考える。

さて北海道が本州の北に存在することは、現代人には自明の事実である。しかしそれは近代に入つて明らかになつたのであり、それ以前の北太平洋地域は、先住民を除けば世界の大多数にとつては未知の領域であつた。とくにエゾつまり北海道の存在は、十七、八世紀には地理学上の大問題であつて、レジスが沿海地方を調査するまでは、エゾは島であるのか、それとも大陸の一部なのかで、専門家の間でも見解は分かれていた。^①

わたしがエゾ問題の存在を知つたのは、数年前に遡る。十七世紀末に中国に入つたベルギー人のイエズス会士、アントワヌトマの地図を見ていたときであつた。そこには本州の北に海峡を挟んで大陸が伸びており、その一角は点線で囲んであつてエゾ Yesso とあつて、松前 Mazuma などの地名が記されていた。^② 不思議に思つて調べていくと、その当時ヨーロッパにおいては、エゾの位置をめぐつて論争があつたことを知つた。^③ さらに関連の史料を収集して検討を重ねるうちに、わたしは一七〇九年にレジスらが東北アジアを調査したときに、わざわざ沿海地方を通つた目的も、このエゾ問題と関係していたのではないかと考えるに至つた。そしてやがてそれが、エゾ問題を解決するためであつたことを確信するようになった。

本稿でわたしは、最初に中国在住のイエズス会士たちが抱いていたエゾ観について明らかにする。次にレジスたちが行なつた沿海地方の調査を説明し、レジスが行なつた研究の意義について論じることにする。

① 問題の所在を知るためには、F. A. Golder, *Russian Expansion on the*

Pacific, 1641-1850, Cleveland, 1914, chapter. V, Terra de Jeso.

J. A. Harrison, *Japan's Northern Frontier*, Gainesville, 1953, appendix 1, 'The Discovery of Yezo: A Boscaro and L. Walter. Ezo and Its Surroundings through the Eyes of European Cartographers. L. Walter (ed.), Japan, Munich, 1994. が役に立つ。日本語の文献としては、海野一隆『地図に見る日本』（大修館書店、一九九九年）IV 蝦夷地、秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』（北海道大学図書刊行会、

一九九九年）などがある。しかしいずれも、レジスの調査の意義に欠いていない。なお本稿ではエゾと「エゾ」とは、ヨーロッパの用例に従って、北海道の古称として使う。
 ② J. Sebes, *The Jesuits and the Sino-Russian Treaty of Nerchinsk* (1689), Rome, 1961, 付図を参照。
 ③ 註①に同じ。

第一章 中国在住イエズス会士のエゾ観

大航海時代の結果、世界地図の上に残された空白地域は大幅に減少したが、日本の北方海域を含むユーラシア大陸の東端が、どういう形状をしているのかという問題は、依然として謎のままであった。そうした中で十六世紀半ばに、本州の北にエゾという地域が存在して、先住民のアイヌが居住することが、ヨーロッパ人の間に知られるようになった^①。しかし情報が限られていたので、エゾの形状や位置をめぐる疑問は、永く解明されることはなかった。その間エゾをめぐる、果てしない論争が繰り返されたが、とくに十七世紀中にはそれが島か、あるいは大陸の一部かということが、議論の中心となった。

中国に滞在したイエズス会士も、この論争に強い関心を示した。十六世紀の後半以来キリスト教の勢力は、マカオを拠点に日本の各地に浸透したが、江戸幕府がキリシタンを追放した後は、日本からほとんど消えてしまった。そのために中国のイエズス会士たちは、日本に入るための新しい方法として、エゾを経由するルートを模索していた。かれらにとってエゾがいかなる土地であるかは、重大な問題であったのである。

日本とエゾに関して、重要な情報を提供したのは、日本にいたイエズス会士の文書や書簡であった。ただこれらの原資料は、だれでも自由に利用できなかったもので、一般にはそれらを編纂して出版された書物が、日本とエゾの情報をヨーロッパ

ツパに広めた。十六世紀末以来ヨーロッパ、とくにカトリックの世界で、日本についてもっとも権威があるとみなされたのは、ジョヴァンニ・マフェイの『インド史』である。この中でマフェイは、日本本土については第一部「インド史」の第十二巻に、主にイエズス会の巡察使アレサンドロ・ヴァリニャーノの資料にもとづいて記述した^②。一方第二部「インドからの書簡」の第四巻には、イエズス会士のルイス・フロイスが一五六五年三月二日に日本から送った書簡を引いて、エゾの先住民アイヌに関して紹介している。中国に滞在したイエズス会士は、常にこれらの記述を参照しており、日本に関するかれらの知識は、基本的にはマフェイを越えるものではなかった。

さて中国在住のイエズス会士で、エゾを最初に地図に描いた人物は、マテオ・リッチである。一六〇二年に製作した『坤輿万国全図』において、リッチは日本の北方海域を現実とは似つかない不思議な形に描いている。本州の北端は、北緯四十度付近に位置し、その北には島がひとつあって、朝鮮半島の付根から海岸線が、ほぼ東西に湾曲しながらその島の北まで伸びて、日本列島を北から覆うかっこうになっている^④。

リッチの『坤輿万国全図』は、そのほとんどを既成の地図に依拠している。中でもメルカトル、オルテリウス、プランチウスなどヨーロッパ人の地図に負うところが大きい^⑤。ただ東アジアに関しては、アジア人の地図を参考にしており、たとえば中国本土の形状は、十六世紀に中国で作られた『広輿図』を模倣している^⑥。ところがリッチの描く日本列島の形は、日本の行基図をまねてはいるが、それよりも進歩しており、とくに本州の北にある島や沿海地方の海岸線は、従来の地図では知られていなかった^⑦。もちろん中国の地図にも現われない。リッチはこうした構図を自ら考案したとは考えられないので、どこかでそれを学んだはずである。

さて十六世紀末に日本では、新しい型の東アジア地図が出現した。これらの地図はエゾをユーラシア大陸の一部とみなし、朝鮮半島の付根から大陸の海岸線を東に延ばして、本州北端の対岸部分をエゾであると考えた。このような形状を描いた具体例としては、一五九三年に作成された豊臣秀吉の扇面図と、一五九六年に写されたサンフェリッペ号の航海図な

⑧をあげる事ができる。これらの地図は、経緯度がないなど欠陥をもつが、それにもかかわらず北方図の歴史を転回させる画期的な内容を含んでいた。

このような地図が日本で出現した理由は、朝鮮や北海道に対する秀吉の拡張政策が発端になって、東北アジア地域に対する地理的な関心が、強まったことに関係があるといわれる。⑨同様の地理観は、当時上級武士の間に相当広まっており、かれらを通じて海外にも流れた。たとえば一六〇七年に日本を訪れた朝鮮通信使のキョンソム（慶運）は、その旅行記『海槎録』において、

（五月）二十九日辛卯……江戸に留まる。支官等云く、日本陸奥州の境は、貴国北方の胡地と一海を隔て、互相に往来す。仍つて天兵尚ほ朝鮮に留まるを聞く、と云々。

と、接待の武士からそのはなしを聞いたと記している。しかし中国にいたリッチが、これから直接想像をふくらませたとはいえない。

同じ時期に日本では、さらに一種新しい地図が現われた。これは第一の地図を改良したもので、全体の構図はほとんど同じであるが、エゾをユーラシア大陸から分離して、大陸と本州との間に浮かぶ大きな島としたことと、今の日本海を、朝鮮半島、大陸の海岸線、日本列島で周囲を囲まれる内海として表わしたことに、その特徴がある。日本の各地に残る屏風の世界図や各種の航海図が、その代表例である。第二の地図を作成したのは、長崎在任のイエズス会士といわれ、第一の地図とともに、一五九〇年に巡察使ヴァリニャーノに同行して日本を訪れた、イナツシオモレイラの日本地図も参考⑩にしている。モレイラは西日本の各地で測量を行なったが、かれ自身は京都から東へは行ったことがないので、東日本の位置は、日本人の情報にもとづいて推定した。その結果モレイラは、本州北端の緯度を約三十九度と計算した。⑪日本で永く活動したイエズス会士、ルイスフロイスが、その著『日本史』の中で、

この朝鮮地方は……北部および北東部ではタルタル人とオランカイ人（の土地）に接している。オランカイ人（の土地）は、日

本の北部と大きい入江を形成し、蝦夷島の上方で北方に向かって延びている突出した陸地である。

と述べるのは、この地図を念頭に置いたものだろう。^②十八世紀以前のヨーロッパ人は、中国の北に広がる地域を漠然とタルタリアと呼んでいた。タルタル（タルタル）人はそこ生きる住民のことで、ここでは満洲人とモンゴル人を指す。またオランカイは、朝鮮の文献にいう兀良哈、清人のいうワルカのことで、朝鮮の東北部、豆満江北岸にいた女直集団を指す。フロイスによると、エゾはオランカイの南方に存在するという。ちなみにフロイスがマフェイの委嘱を受けて、『日本史』の執筆を始めたのは、一五八三年からであるが、かれがこの部分を記述したのは、九五年ころと推定される。^③リッチの描く日本の北方地域は、第二の地図と酷似するので、おそらくリッチはそれに倣って、東アジアの部分を描いたのであろう。

『坤輿万国全図』においてリッチは、日本に関して次のような説明を行なっている。

日本は、乃ち海内の一大島なり。長さ三千二百里、寛さ六百里を過ぎず。今六十六州有り、おのおの國主有り。俗は強力を尚び、総王有るといへども、而して権は常に強臣に在り。其の民は武を習ふもの多く、文を習ふもの少なし。土は銀・鉄・好漆を産す。

其の王は、生子年三十にならば、王を以て之に讓る。其の國は大抵寶石を重んぜず、只金・銀及び古密器を重んず。

この文章は、マフェイの『インド史』などをもとにしている。^④

また日本列島の地名については、『広輿図』掲載の行基図を参考にする。しかしその地名と位置には杜撰なところがある。紀伊を伊紀として四国に置いたりする。^⑤また北海道の位置にある上述の島には、佐渡、加賀、能登などの地名を付しており、この島が北海道（エゾ）ではなくて、別の島であるかのような疑いをいだかせる。

他方でユーラシア東北部の地名（民族名）は、ほとんどが『文献通考』から借用したものであるが、中には架空のものまであり、しかも恣意的に配置されている。ここでリッチは上述の島の真北にあたる大陸の沿岸に、「野作」という地名を記入しているが、野作は『文献通考』にはみえないので、かれの造語と考えられる。通説によると、この野作こそがエ

ゾであるというが、真偽のほどは不明である。しかし中国在住のイエズス会士たちは、野作をエゾのことと理解したのである。

次にイエズス会士のジョアン・ロドリゲスは、永らく日本で通訳として活躍していたが、一六一〇年にマカオに追放され、一時期中国本土に入ったこともある。ロドリゲスは『日本教会史』を著して、日本と中国両方の社会について書き残した。かれはその原稿を一六二二年までにほぼ仕上げたが、その後も随時加筆を行なっている。その中でロドリゲスは、エゾを東部タルタリアに接近する島と考えて、その間は海峡を隔てて、たがいにみえるほどの距離しかないと述べる。またエゾは、オランカイに属していたという^⑮。

ロドリゲスの記述は、当時日本で流布していた諸説の影響を受けており、とくにイエズス会士のジェロニモ・アンジェリスの説に負うところが大きい。アンジェリスは、北海道に上陸した最初のヨーロッパ人で、一六一八年と二年の二度北海道に赴いた。イエズス会に提出したその報告書によると、最初の渡航においては、エゾはユーラシア大陸と地続きであると推測したが、再度の渡航ではそれを撤回して、エゾは海峡（テッシヨイ、テソイ）により大陸と分断される島であると考えるに至った。その理由としてかれは、エゾの西端テッシヨイでは対岸の馬を望見できるほどだが、間の海は流れが激しく、もしもそれが入海であれば、このような激流は生まれないと推測した。さらにエゾには万人が従う君主は存在せず、また大きな領主もないが、それはエゾが周囲の国から分断されていて、それと交渉をもたないからであるというのである^⑯。アンジェリスの考えは、本来ならばもっと注目されてもよかったが、しかしその後一世紀間は埋もれたままであった。中国在住のイエズス会士たちも、その説をとりあげることはなかった。

ロドリゲスは、エゾの緯度に関して新しい見解をもたらした。それまで本州の北端は、北緯三十九度ないしは四十度と推定されていて、リッチも四十度になっている。ところが十七世紀初め日本に新説が現われて、それを四十二度前後に改めた^⑰。ロドリゲスはその仮説に従って、北海道を除く日本列島の北緯は、三十度から四十二度半の間であるとして、本州

北端の緯度を四十二度半に変更している。^{②①}

なお一六二三年に北京では、リッチの後任であるニコロロンゴバルディとマヌエルディアスが、地球儀を完成した。^{②②}本州とユーラシア大陸との間に、東西に長い島を配置する構図は、リッチに由来する。他方ジュリオアレニは、世界地誌の『職方外紀』(一六二三)を著したが、その挿図に描かれるユーラシア北東部の形状は、ロンゴバルディらの地球儀と同じである。したがってロドリゲスの影響は、両者には基本的にみられない。ただしアレニは、本州の北端を四十二度付近と考えており、この点だけは日本の新説を採用したのである。^{②③}

続いてイタリア人のイエズス会士、マルチノ・マルチニであるが、かれは七年余り中国で布教に携わった後の一六五〇年に、典礼問題を説明するためヨーロッパに戻った。その間にマルチニは中国の地理書から資料を収集し、それに自分と同僚の宣教師たちが中国各地で観測したデータを加えて、新しい中国地図を作成した。そしてオランダの有名な地図製作者ヤン・ブラウの叢書『新地図』の一冊として、それを『中国新地図帳』の名で刊行する。マルチニの地図は、ヨーロッパで作られた最初の科学的な中国地図となった。^{②④}

この中でマルチニはエゾについて、次の如く説明を行なっている。^{②⑤}

マフエイ Mateo は、われわれの会の一員であるが、ほとんど中国の歴史家のことばを利用しながら、「(インドからの)書簡」の第四巻にそれについて記述している。多くの未開人が住む面積のとても大きな国が存在する。それは北方で日本と接し、みやこの町からは三百リウ(あるいは二百五十四マイル)離れている。人びとは獣皮の衣服を着、身体に毛があつて、とても長い頸ひげと口ひげをもつ。かれらは水を飲みたいときには、それを棒でもちあげる(捧酒甕)。この国民はとりわけとても酒を好み、好戦的で、日本人に恐れられている。かれらは戦いで負傷すると、傷口を塩水で洗う。それは、かれらがつ唯一の薬である。かれらは銅製の鏡を胸にかけるが、それによつて矢の攻撃から身を守ることができるという。またたいいはタルタル人の間でもつとも裕福なものが、それを身につけるといふ。かれらは剣を頭に結わえるので、その柄は肩の上にとぶら下がる。かれらはただ天などを崇

押する習慣をもつことを除くと、いかなる儀式も行なわない。何人かのものが、このエゾ「*Esso*」（わたしはヨーロッパの人びとも）にこう呼ぶ。中国人が与えているエゾ「*Esso*」の名は、これを放棄する。の地が島か大陸かどうかで、論争をしている。だがもしわれわれが中国人を信じたいと思うならば、実際にはそれは住むひともいないタルタリアの一部である。そしてヌルハン（*Nulhan*（双児干）とユピ「*Yupi*（魚皮）」は大陸であるにしても、しかし日本が島ではないということにはならない。というのはそれをエゾから分ける海峡が、存在するからである。わたしはどうかといえは、ものが疑わしいときには、何も請け合わないことを約束する。わたしは読者に地図を参照させるが、それには中国の地図を描いた。

マルチニが引くマフエイの文章は、前述した如くフロイスの書簡にもとづく。アイヌの特徴もまた、フロイスが述べたもので、中国の歴史家からとつたのではない。またエゾ（野作）が中国人から出たというのも舌足らずで、事実にはリッチの『坤輿万国全図』に始まる。

一般にマルチニは、リッチに追隨する傾向があつたといわれるが、^②後者がエゾを大陸に置くことに対しては懐疑的であつた。『中国新地図』の東アジア地図においては、日本北方の形状と緯度は『坤輿万国全図』と大体同一であるが、マルチニは本州と大陸の間の島をエゾ「*Esso*」と呼ぶ。またマルチニの記述から、十七世紀前半に北京のイエズス会士の間では、エゾが島であるか大陸と地続きであるかで、論争が続いていたこともわかる。

次いでベルギー出身のフェルディナンド・フェルビーストは、清に再入国するマルチニとともに、一六五九年に中国の地を踏んだ。フェルビーストは七四年に『坤輿全図』を製作したが、そこでかれは本州の北、北緯四十二、三度以北にひとつの島を置いて、それに「野作」と記す。^③注意すべきは、その島の東海岸に独特な形の半島が、三つ描かれていることである。このような半島は、マルチニ以前の宣教師の地図には現われない。それは、一六四三年にこの海域を調査したマルテン・フリースの海図に描かれるエゾの形に近い。この年オランダの東インド会社により派遣されたフリースの船団は、本州の東岸を北上して北海道南部に接近し、それからクナシリ・エトロフ間の海峡を通過して、サハリン南部のアニワ湾

と中部のテルペニヤ湾に達した。その後南に引き返し、北海道東部の厚岸湾に入っている。その間にフリースらは、アイヌ民族と交流を行なって、かれらが上陸した地点がエゾであることを確信し、海図の中に北海道東部とサハリン南部を結合して、全体をひとつのエゾとして描いた^③。その海図はヨーロッパ中に広まって、三つの半島をもつエゾが多くの地図に表現された。フェルビーストはヨーロッパにいたときにそのひとつを見て、その重要性を認めていたのであろう^④。フェルビーストのいう野作はエゾのことで、かれはエゾを島と考えるのである。

最後に前述したトマは、ベルギー人のイエズス会士である。かれは始め日本での布教を夢見て、一六八二年にマカオに入り、以来中国での布教に従事していた^⑤。トマはフェルビーストの仕事を引き継いだが、エゾの問題に関してはフェルビーストに同調せず、リッチ以来の伝統に従って、エゾを大陸の一部と考えた。すなわちトマが一六九〇年に作成したユーラシア大陸の地図では、本州の北端は北緯四十度付近で、経度は北京から東に二十五度から三十度の付近にある。一方エゾ *Yesso* は朝鮮半島から東西に伸びる大陸の沿岸部に含まれて、本州とは海峡を隔てて対面している^⑥。地図と同様の考えは、一六九八年の書簡にもみることができ^⑦。トマは日本に特別の思い入れをもっており、エゾを経由して日本で布教することは、かれの夢であった。トマはエゾがユーラシア大陸の東北に位置して、中国から容易に到達できるようにとの願望をこめて、この地図を描いたのであろう。

かんたんではあるが、以上が中国で活躍したイエズス会士たちの代表的なエゾ観である。その間百年近いときが流れているが、様々な見解が並立して、ひとつに収斂することはなかった。ただエゾを大陸の一部と考えるものも、あるいは島というものも、エゾが朝鮮半島の東北、あるいは本州の北に位置するという点では、一致していた。しかしかれらはだれも現地には行ったことはなく、すべては推測にすぎない。したがってこの論争に決着をつけようと思えば、実際にその地点に立って、そこがエゾであるかどうかを確かめるのが、最善の道であった。おそらくレジスも、もし機会を与えられるならば、そこに行ってみたいと考えていたにちがいない。

- ① エゾ（北海道）に関して、最初にヨーロッパに報告したのは、ゴアに滞在したイエズス会士ランチロットの「日本情報」である。Boscaro and Walter, *Ezo and Its Surroundings through the Eyes of European Cartographers*, p. 84. また岸野久「西欧人の日本発見」（吉川弘文館、一九八九年）第六章には、その邦訳が掲載されている。
- ② D.F. Lach, *Asia in the Making of Europe*, vol. 1, The University of Chicago Press, 1965, pp. 326, 706. プフェイについては、長島弘氏から、教示をいただいた。記して謝意を表した。
- ③ I.P. Matfeii, *Historiarum Indiarum libri XVI. Selectarum item ex India Epistolarum, eadem interprete libri*, IV, Cologne, 1593, p. 419. (京都大学文学部西洋史研究室蔵)。わたしは、村上直次郎訳「耶穌会士日本通信」上巻（東京、一九二七年）にある同一書簡の邦訳を利用した。一九二頁。ただし邦訳では二月二十日付けとなっているが、この理由についてはよくわからない。ここでは原文の日付に従った。
- ④ 「坤輿万国全図」について、わたしは京都大学附属図書館蔵本を利用した（実際に見たのは、閲覧用の複製本）。なお宮城県立図書館蔵本は、船越昭生「マテオ・リッチ作成世界地図の中国に対する影響について」（『地図』第九巻第二号、一九七一年）に付される写真が、参照に便利である。
- ⑤ 林東陽「利瑪竇の世界地図及其对明末士人社会的影響」（『紀念利瑪竇東華四百週年中西文化交流國際學術會議論文集』（輔仁大学出版社、一九八三年）三二一～三二六頁に詳しい。なおこの文献については、波辺佳成氏にコピーを送っていた。記して謝意を表した。
- ⑥ B. Szczechniak, Matteo Ricci's Maps of China, *Imago Mundi*, 11, 1954, pp.127～129. 船越昭生「坤輿万国全図」と鎖国日本」（『東方学報』（京都）第四十一冊、一九七〇年）六六八頁、林「利瑪竇の世界地図及其对明末士人社会的影響」三二七頁などを参照。
- ⑦ 岡本良知「十六世紀における日本地図の発達」（八木書店、一九七三年）二二〇～二三三頁を参照。
- ⑧ 岡本前掲書一三二～一四五頁を参照。
- ⑨ 岡本前掲書一三二～一三五頁を参照。
- ⑩ 岡本前掲書一四六～一五一頁を参照。
- ⑪ 岡本前掲書一〇六、一〇七頁を参照。
- ⑫ 岡本前掲書一四六～一五一頁を参照。なおフロイスの文章は、松田毅一・川崎桃太郎「フロイス日本史」第二巻（中央公論社、一九七二年）二二二頁による。
- ⑬ 岡本前掲書一四六、一四七頁を参照。
- ⑭ リッチは、マフェイやヴァリニャーノと交流があり、その影響があったことは確実である。マフェイ『インド史』の仏語訳をみると、王が子に位を譲ることなど、同様の記述があるが、数字に違いがあるので、リッチは他の資料も参考にしたと考えられる。（*L'Histoire des Indes orientales et occidentales*, Paris, 1665, pp. 135, 136, 138～141, 147. 天理図書館蔵）なお、ドスベンス著、古田島洋介訳「マテオ・リッチ―記憶の宮殿」（平凡社、一九九五年）七四、九三頁などを参照。
- ⑮ 羅洪先「広輿図」（万曆七年）巻一日本図。
- ⑯ K. Chen, A Possible Source for Ricci's Notices on Regions near China, *Young Pao*, 34, 1938, p. 182.
- ⑰ ジョアン・ロドリゲス著、佐野泰彦他訳『日本教会史』上巻（岩波書店、一九七〇年）解説、四「編述の時期」を参照。
- ⑱ ロドリゲス『日本教会史』上巻、一三三、一三三、一七五、二〇九頁を参照。
- ⑲ アンジェリスの見解については、チースリク編『北方探検記』（吉

川弘文館、一九六二年)第二部に邦訳がある。「アンジェリスの第一次蝦夷報告」五五頁、「アンジェリスの第二次蝦夷報告」八九―九三頁を参照。

⑳ 岡本前掲書二七一―二七五頁を参照。

㉑ ロドリゲス『日本教会史』上巻、一五一、一九四頁を参照。なお二三七―三三八頁では、本州北端を四十二度半あるいは四十三度と云う。

㉒ 大英博物館に所蔵されるロンゴバルディとティアスの地球儀について、H.M. Wallis and E. D. Grinstead, *A Chinese Terrestrial Globe, A.D. 1623, The British Museum Quarterly*, 25, 1962, pp. 86-89, に詳し。

㉓ 岡本前掲書二七二頁を参照。

㉔ H. Bernard, *Les étapes de la cartographie scientifique pour la Chine et les pays voisins, Monumenta Serica*, 1, 1935-36, pp. 446-448.

㉕ わたしは、仏語訳を使用した。J. Bienen, *Le grand atlas, ou cosmographie Blaviana*, vol. 11, (reprint), Amsterdam, 1968, p. 27.

第二章 一七〇九年にレジスらが通過したコース

清の康熙帝は、中国本土と周辺地域の地図を作成する意図を、早くから心に抱いていたと考えられる。とくに清発祥の地である東北地区や、ネルチンスク条約で定めたロシアとの国境地域に関して正確な地図を作ることは、永年の懸案となっていた。その間康熙帝はイエズス会士に対して、この地域の地図を試作させようとしたこともあった。たとえば一六九八年にはトマにモンゴル(西タタルリア)の地図を作成させており、翌年にはさらに東北地区(東タタルリア)で測量を行

⑳ Bernard, *Les étapes de la cartographie scientifique pour la Chine et les pays voisins*, p. 447.

㉑ わたしは、国立国会図書館所蔵の『坤輿全図』(咸豊十年重刊)を利用したが、現在は曹婉如他編『中国古代地図集』(清代)(文物出版社、一九九七年)でもみることができ。

㉒ フリースの海図については、Boscaro and Walter, *Ezo and Its Surroundings through the Eyes of European Cartographers*, p. 85.

㉓ たとはは東京国立博物館に所蔵されるフィッセル改訂ブラウ世界図(一六七八年)も、『坤輿全図』と近い関係にある。フェルビーストは同種の世界地図をモデルにして、『坤輿全図』を製作したのである。織田武雄他編『日本古地図大成』(世界図編)(講談社、一九七五年)一六七頁を参照。

㉔ トマについては、ルイズデメディナ『遙かなる高麗』(近藤出版社、一九八八年)一四九―一六三頁を参照。

㉕ 「はじめに」註②に同じ。

㉖ ルイズデメディナ前掲書第二部「未刊史料」、三三三頁を参照。

なわせる予定であった。だが同年に黄河が氾濫したために、計画は実施されなかった。②
 (一七〇七)に康熙帝は、イエズス会士のバランナンの勧めに従って、かれらに北京周辺の地図を作らせることにした。③
 康熙帝はその仕事に満足して、中国全土と周辺の地図製作を本格的に開始させたのである。

最初にブーヴェ、レジス、ジャルトウの三人の宣教師が、翌康熙四十七年四月十六日(陽暦一七〇八年六月四日)から同年十一月三十日(陽暦一七〇九年一月一日)まで測量を行なつて、長城全体の地図を完成した。④
 イエズス会士がとりかかったのは、中国の東北地区とその北方に広がる地域の地図製作である。康熙四十八年にレジスとジャルトウにフリデリを加えた三人のイエズス会士が、満洲人らとともにこの地方の測量に向かった。『黒龍江將軍衙門檔案』第二七四冊、康熙四十八年四月十三日の条には、調査隊が通過する予定のコースについて、詳しい記述が残っている。コースの問題は、調査の目的と密接に関連するので、これから説明を始めることにする。それによると調査に先立つ三月二十三日(陽暦五月二日)に、この計画を指揮する護軍參領デクジンゲらが、康熙帝に調査の指示を求めたところ、帝は次の如く命令したという。

汝らは山海関を出て、海岸に沿つて測定して作図しながら行き、鳳凰城に届けよ。鳳凰城から長白山まで通り抜けることはできないので、興京を目指して行け。盛京で馬を代えるのだぞ。汝らは盛京で馬を代えて、興京からインゲ(イエンゲ)関を出て、旧道を行き、ラファア駅、ニングタからホンジュン(フンチュン)、スイフン(を経て)、ウスリ川を下つて、ゲリン(ゴリエン)川、ヘンゲン(アムゲン)川を目指して行け。汝らが近づくことのできないところは、汝らには有名な場所、大山を尋ねて、地図の中に描かせよ。……ヘンゲンより向こうの海まで、人びとは往来するのかもしれないのか。行くならばいかなる種類のものを交易するか、汝らはそれを尋ねよ。汝らは向こうに行くときに、わたしがここで指示した場所に至ることができれば、そのまま行け。もしも近づくことができないところは、汝らは勅令が下つたといつても、軽率には行くな。……

調査隊は山海関を越えて、渤海沿いに朝鮮との国境まで達した後、長白山の西側を迂回して盛京に出て、それから東に二

ングタ經由で、フンチュン、スイフン川、ウスリ川など、沿海地方の南部に向かう予定であった。その後はウスリ川を下ってアムール川に入り、最終的にはアムール下流の支流ゴリユン、アムグン兩川付近まで行くことになっていた。この計画で問題となるのは、調査隊がニングタから沿海地方の南部に迂回するコースを行くことである。もしもアムール下流地方に急ぐのであれば、ニングタから水路で牡丹江、松花江と下り、アムール川に入るのがふつうである。一行がわざわざこのコースを選んだのは、何か目的があつたと理解すべきである。わたしは、それはエゾの問題を検証するためであつたと考へる。

檔案によれば、上述のコースを決定したのは、康熙帝ということになっているが、帝がエゾの問題について、かねてより宣教師たちに学んでいて、その調査に関心をもっていたことはまちがいない。康熙帝は、トマに対して次の如く語つたことがある。^⑤

わたしは、東海までの朝鮮王国の国境を、ついで狭い海峡によって東タルタリアから分けられている日本の北部国境の対岸を踏破するべきである。

これによると、帝は日本の北方地域について、トマと同一の地理観をもつていたことがわかる。もしもイエズス会士が『皇輿全覽図』を製作するために、沿海地方でエゾの問題を調査したいと願ひ出たならば、おそらく康熙帝は二つ返事でそれを承認したのであろう。わたしは、レジスタたちがエゾの問題を調査することは、康熙帝も了解済みであつたと考へる。ところで前掲の檔案によると、派遣される調査隊は次のような構成であつたという。

勅命により派遣する護軍參領デクジンゲ、トーフアンジ、監察御史ウダリ、員外郎シェレン、五官正チエンデ、西洋人ユワン（？）フェイリイエン（費隱）、レイリヒヨース（雷孝思）、ドウラダメイ（杜德美）、養心殿筆帖式ブルサイ、案内の前鋒ナスタイ、ミンチン、画工二人、そして増員して派遣する郎中グワンドウン、藍翎ヘムイエン、筆帖式ガブラ、タラチ、ガブラ。……

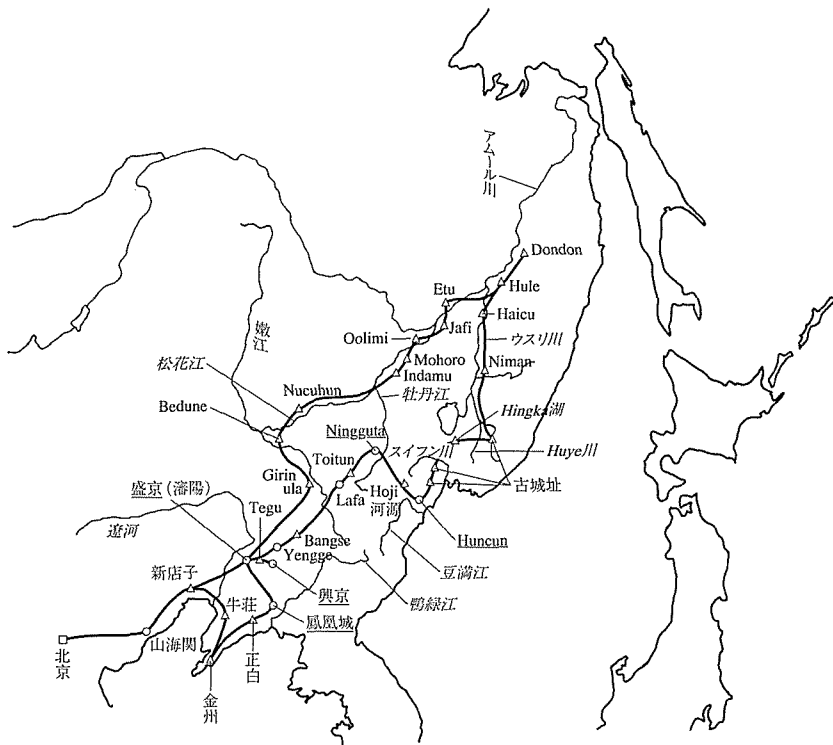
このうち西洋人フェイリイエンは、イエズス会士のエーレンベルトフリデリ、レイリヒヨースは同じくジャンバプテ

イストゥレジス、ドウゥダメイはピエールジャルトウのことである。その他に十人余りの満洲人が、調査隊に参加しており、かれらはイエズス会士に同行して、その行動を監視するとともに、調査にも協力したのである。また一行の通過する先々では、地元の役人や兵も動員されて、観測の資材を輸送したり、測定場所を作るのに協力している。^⑥なお「勅命により派遣される」という表現から明らかなとおり、清は測量に向かうかれらに大きな権限を与えていた。レジスは、協力した満洲人たちについて述べたに述べることはないが、清の意識からすれば、調査隊全体の指揮権はあくまでも清側が握っていて、デクジンゲやトーフアンジなどにそれを代行させたということのようである。^⑦

康熙帝は、『皇輿全覽図』製作の基礎資料を収集するために、こうした調査隊を各地に派遣したが、それらの調査隊はみな同様の組織からなっていた。いずれの隊もイエズス会士を二、三人含んで、全部で十人前後から構成されていた。最も高い地位にあるのは、大體護軍參領（正三品）であつて、その他に吏部郎中や武英殿監視、欽天監監副や五官正などが加わっていた。^⑧このうち欽天監監副や五官正などは、自らも天体観測と三角測量を行なつて、イエズス会士を援けたのであろう。たとえば五官正チェンデは、数学や天文学に相当な学識をもっていたと考えられる。^⑨

ここからはデュアルドが編纂した『中華帝国及び中国領タルタリアの地理的・歴史的・年代記的・政治的・物質的な記述』（以下『中国誌』と略称）第四巻に引用されるレジスの手記と、巻末に掲載される観測地点のリストにもとづいて、レジスがたどつたコースと途中の観測地点を、具体的に説明していく。

さて調査隊が北京を出発したのは、三月二十九日（陽暦五月八日）のことである。^⑩一行は、康熙帝の命令にあつた通りのコースを進んだ。まず山海関から渤海沿いに遼西回廊を北上して、新店子、牛莊を経て遼東半島に入り、先端の金州まで達している。その後遼東半島の南岸を東に進み、途中正白村を経て鳳凰城に至つた。レジスによると、朝鮮への関門であつた鳳凰城には、商人が各地から集まり、交易が盛大に行なわれていたという。続いて調査隊は長白山の西側を迂回して、北西方向に進み盛京（瀋陽）に入った。レジスたちは、市内で盛京五部などの行政機関に立寄つた後、郊外の福陵



- 康熙帝の命令にみえる都市(町)(下線は、レジスらが測量を行なったことを示す)
 △ レジスらの測量地点

地図 イエズス会士レジスらの調査ルート

(東陵)と昭陵(北陵)を観光している。盛京を出ると、かれらはテグ村を経て、興京に寄り道し、清朝の祖先が眠る永陵に詣でた。^⑩

一行は興京から引き返して、再び旧街道を行き、一路ニングタを目指した。当時盛京と東北辺境の軍事拠点であるニングタの間を結ぶ幹線は、撫順を経てイエング関を出、ラファを通過する清初以来の旧街道と、康熙二十年(二六八二)にその北側に開通したばかりの、開原から吉林を経由して、ラファで旧街道に合流する新街道が、並行して存在していた。^⑪このときレジスらは近道である旧街道を行き、イエング関において辺牆を抜けて、吉林地方に入った。その後バンセ城、ラファ駅を通り、六月上旬(陽暦七月十日前後)にニングタに到着した。^⑫

ニングタからは騎都尉イデチエ、驍騎

校ボロクデイン、領催シヨセと兵が、調査隊に同行した。^⑭一行は南の森林地帯を抜け、ガハリ川（嘎呀河）の支流であるホジ川の源流に出て観測を行なった。レジスによると、調査隊はその後豆満江河畔に至り、国境沿いにみえた朝鮮の四つの町を測定したというが、イエズス会士が作成した測定地点のリストには、永遠の名しかあがっていない。それからかれらはフンチュンに達して、その位置を測定したところ、フンチュンの町は北緯四十二度五十五分二十六秒にあることがわかった。この間レジスらは、豆満江の河口を測定している。^⑮

フンチュンを出発してからのコースについて、『寧古塔副都統衙門檔案』第二冊、康熙四十八年六月十二日の条には、勅命により派遣されて、土地を測量して山川を作図にくる大臣は、陸路を測定して、フンチュン、スイフンからフイエ河口に着いたら、ウスリ川を下って水路を測定しながら、ゲリン、ヘンゲンに向かって行く。

とみえる。スイフン川は沿海地方の西端に位置する。さらに『満漢合璧清内府一統輿地秘図』によると、フイエ川はウスリ川の源流のひとつで、現在のアルセニエフカ川にあたる。だがこれだけでは大体のコースしかわからないので、ここでも『中国誌』にもとづいて、イエズス会士がたどったコースを確かめることにする。

さて一行はフンチュンからフンチュン川を遡り、途中にある古城を通過して、その経緯度を測定した。さらに北東の方向に進み、スイフン川に至る。『中国誌』によると、

トゥメンルウラ（豆満江）の次に、満洲人の以前の故郷をずっと前進すると、スイフン川という大河に出会う。われわれは、また東の大洋に流れこむその河口を測量した。……そこからフルダンルホトンと呼ばれる町の廃墟がみえる。……その地方にある他の河川は、スイフン川よりずっと小さい。

⑯
⑰
⑱
というので、かれらはスイフン川の河口近くで測定を行なつてから、スイフン川を遡り、その中流にあつたフルダンルホトンのあたりを通過したと考えられる。それから上流の古城址に達して、そこで再度測定を行なつた。

『中国誌』の記述は、この後一挙にウスリ川まで飛んで、調査隊が通過した途中のコースを省略する。その間かれらは

ハンカ湖（興凱湖）南岸とウスリ川の古城の計二か所で観測を行なったが、その観測値からみると、ウスリ川の古城は、フイエ川との合流点よりかなり上流に位置する。このことから推測して、調査隊はスイフン川と別れたあと、ハンカ湖南岸のレフ川（現イリスタヤ川）の中流に出て、その後北東に進んでフイエ川の下流を越え、ウスリ川の古城付近に達したのである。乾隆年間に編纂された『盛京吉林黒龍江等処標注戰蹟輿図』には、上述したコースと同じ通路が、点線で図示されており、その先端はフイエ川の下流にまで達している。フンチュンからフイエ川下流に出るこのコースは、地元ではよく利用される通路であったと考えられる。

以上の如くフンチュンからフイエ川に至るまでに、宣教師たちは位置の測定を集中的に行なっている。レジスは沿海地方以外の地域では、わざわざ測量地点を述べることはしない。それなのに沿海地方に限っては、いちいちそれを挙げており、このことは、かれがこの地域に特別な関心を寄せていたことを物語っている。

その後レジスたちはウスリ川とフイエ川との合流点に出て、馬を降りて船に乗り換えた。そこには寧古塔副都統マチが船を用意して、調査隊が到着するのを待っていた。これよりさきマチは、一行のためにアムール川の航行に必要な人員と資材の調達を行なった。そしてガイドと水夫には三姓の民をあてることにした。三姓はアムール下流の水路を熟知し、下流の住民とも緊密な交流を保っていたからである。かれらはこのときすでに牡丹江の沿岸に移住していたが、もとはそれより下流のアムール川中流沿岸に居住していて、中国・朝鮮に輸出する毛皮を仕入れるために、しばしばアムール下流に出かけていた。かれらにとってアムール川の下流地方は、自分の庭も同然であった。マチは、三姓のハライダであったカンドイ、ジャハラ、メンケイ、エプチらに次の文書を送った。『寧古塔副都統衙門檔案』第一二冊、康熙四十八年五月十日の条に、

勅命によりゲリン・ヘングンなどの地方に大臣を派遣して、土地を測量する。かれらは到着し次第、水路で測量に行く。これらの行く大臣たちに、おまえたちの三姓からガイド八人を選び出して準備させよ。船八隻を出せ。遅れてはこまる。……

とある。六月二日になってマチは、再び三姓に命令を發して、ガイドを八人から二十人に増加させた^⑩。その直後に調査隊がニングタに到着して、協議の結果船をさらに数隻増やすことになった。また三姓の船にはそれぞれ漕ぎ手七人を乗せることにして、さきに決定したガイドに加えて、さらに三十六人を集めさせた。なおこれら三姓の民には、それぞれ二か月分の食料を準備させている^⑪。

レジスらは、その船に乗ってウスリ川を下った。ニマン村に達したところで、一度経緯度の測定を行なっている。ニングタの官船は木釘製の脆弱な構造で、壊れたり浸水する恐れがあつたので、調査隊はビキン川の河口まできて、たまたま通りがかつたベドウネ協領セシトウらが乗る鉄釘を使った船五隻を借りうけ、それに乗り換えた^⑫。それからウスリ川河口付近のハイチュ、フレ両村を通過してアムール川に入り、八月五日（陽曆九月八日）前後にアニューイ川の河口に近いアムール沿岸の村ドンドンに達する。ところがすでに寒気が厳しく、アムール川も凍結し始めて、航行が危険になつたので、レジスたちは調査を続行することを断念して、引き返すことにした^⑬。

その後調査隊は上流に向かい、ウスリ川の河口を過ぎて、エトウ村で位置の測定を行なつた。さらに遡って、ジャフイ村を経て松花江に入り、オーリミ、モホロ、インダムと続いて測定して、牡丹江の河口まできて、イランハラで下船した^⑭。一方ニングタでは副都統のマチが、調査隊を迎える準備を始めていた。予定ではかれらは八月十五日（陽曆九月十八日）までにイランハラに上陸して、八月下旬（陽曆九月末ごろ）にはニングタを経由して吉林まで行くはずであつた。そこで七月二十五日（陽曆八月三十日）に騎都尉カニオをイランハラに送って、三姓のハライダとガシャングに対して、調査隊がイランハラに到着するのに合わせて、馬を準備させた。また七月二十一日（陽曆八月二十六日）にはニングタ⇄吉林街道（新道）沿いの六駅に対しても、十分な数の馬を準備するように命じている^⑮。

以上のようにマチは、帰りの準備を進めていたが、調査隊はそれを無視して別のコースをとつた。すなわちイランハラに上陸した後、ニングタには向かわず、松花江に沿って西に進んだのである。かれらはなぜコースを変更したのか、史料

では一切明らかでないが、おそらくレジスタたちは往路とは別のコースを行って、できるだけ多くの地点で測定をしたかったであろう。調査隊に同行していたニングタの騎都尉イデチュエらは、イランハラで調査隊と別れて、船で牡丹江を遡ってニングタまで帰った^②。他方レジスタたちは、ベドゥネへの途中松花江北岸のヌチュフンで観測を行なって、ベドゥネに入った。『中国誌』にはベドゥネについて、その位置と住民、さらには副都統が駐防することなどを、かんたんにふれるだけである。調査隊はベドゥネから吉林に入って、次いで盛京、山海関を経て、十一月始め（陽暦十二月始め）ごろ北京に帰り着いた^②。

この間ニングタとベドゥネの副都統は、調査隊に各種の援助を与えたはずであるが、『寧古塔副都統衙門檔案』にはそれに関する記述は現われない。ただ第一二冊、十二月十六日の条に、調査隊に供出した三姓の馬が、三二頭死んだことをい述べ、また同じく九月九日の条に、吉林、ニングタ、ベドゥネから供出した馬四一頭が、死んだり逃げたりしたことをいうだけである。翌九月十日（陽暦十月十二日）の条には、寧古塔將軍が、調査隊が使役したベドゥネと吉林の馬を十分に休養させて、元氣にして送り返すように語っているのがみえるので、調査隊が吉林を出発したのも、このころであろう。

① 翁文灝「清初測繪地圖考」『地理雜誌』第十八年第三期、一九三〇年（四）一三、四一四頁、および三上正利「康熙時代におけるゼスイツトの測図事業」『史淵』第五十一輯、一九五二年）二八二—三〇頁を参照。

② H. Bosmans, L'oeuvre scientifique d'Antoine Thomas de Namur, S.J. (1644-1709), *Annales de la Société scientifique de Bruxelles*, sér. B, Sciences physiques et naturelles, 46, 1926, pp. 161—165.

③ 康熙帝が東シベリア地域の地図製作を具体的に考へ始めたのは、同年に行なった南巡の旅から北京に戻ったあとである。J. de M. de Maillet, *Histoire générale de la Chine*, tome, 11, Paris, 1780, pp.

313, 314. またコーピルによると、康熙帝に長城の地図をみたいという希望を起こさせたのは、北京にいたイエズス会士のパラナンであったこと。A. Gaubil, *Correspondance de Pékin, 1722-1759*, Geneva, 1970, p. 214. 一七二八年付けのズンエ神父あての手紙。また石田幹文助「歐人の支那研究」（東京、一九三二年）一八八頁を参照。

④ J.B. du Halde, *Description géographique, historique, chronologique, politique, et physique de l'empire de la Chine et de la Tartarie Chinoise*, Paris, 1735, (以下に同じ) *Description et cartes* tome, 1, préface, pp. 29, 30. 同 *Gaubil, Correspondance de Pékin, 1722-1759*, p. 214. 乾隆七年四月二日

- うが、正しくは六月四日である。H. Bernard, Note complémentaire sur l'Atlas de Kang-hi, *Monumenta Serica*, 11, 1946, p. 194.
- ⑤ Bosmans, L'oeuvre scientifique d'Antoine Thomas de Namur, S.J. (1644-1709), p. 164. なお『清実録』康熙四十五年十月丁未の条には康熙帝が日本（倭子國）の位置を朝鮮半島の東と考へていたことを述べる。「論大学士等曰……聞其國（朝鮮）有八道、北道与瓦爾喀地方・土門江接界、東道接倭子國、西道接我鳳凰城、南道接海、猶有數小島……。」これも、同様の地理観から出たことではあろう。
- ⑥ Du Halde, *Description*, tome, 1, préface, pp. 28~29.
- ⑦ 方豪「康熙五十八年清廷派員測繪琉球地圖之研究」（『国立台湾大学文史哲學報』第一期、一九五〇年）一七一頁、および太田美香「『皇輿全覽圖』についての新史料」（『史観』第一一三冊、一九八五年）五七―六三頁、澤美香「檔案史料から見た『皇輿全覽圖』とヨーロッパ技術」（『史観』第一二二冊、一九八九年）五三―五七頁を参照。
- ⑧ 太田（澤）前掲論文を参照。
- ⑨ 「御製律曆淵源」纂修編校諸臣職名の「考測」に列挙される「成徳」が、チェンデであろう。また『清史稿』卷四五時憲志に、「先是命……原任欽天監監副成徳、皆扈從侍直、上親臨提命、許其間難如師弟子。」とみえる。
- ⑩ Du Halde, *Description*, tome, 1, préface, p. 30.
- ⑪ Du Halde, *Description*, tome, 4, pp. 3~5.
- ⑫ 叢佩遠「清代東北的驛路交通」（『北方文物』一九八五年第一期）八三―八四頁を参照。
- ⑬ Du Halde, *Description*, tome, 4, p. 3. および「寧古塔副都統衙門檔案」第二二冊、康熙四十八年六月十日の条。
- ⑭ 「寧古塔副都統衙門檔案」第二二冊、康熙四十八年十一月二十日の条。
- ⑮ Du Halde, *Description*, tome, 4, p. 9.
- ⑯ Du Halde, *Description*, tome, 4, p. 10.
- ⑰ 「寧古塔副都統衙門檔案」第二二冊、康熙四十八年五月十日、六月二日、そして六月十日の条。
- ⑱ 拙稿「十七世紀アムール川中流地方住民の経済活動」（『東方学』第九十五輯、一九九八年）九―一三頁を参照。
- ⑲ 「寧古塔副都統衙門檔案」第二二冊、康熙四十八年六月二日の条。
- ⑳ 「寧古塔副都統衙門檔案」第二二冊、康熙四十八年六月十日の条。
- ㉑ 註⑭に同じ。
- ㉒ Du Halde, *Description*, tome, 4, p. 7.
- ㉓ 註⑭に同じ。
- ㉔ 「寧古塔副都統衙門檔案」第二二冊、康熙四十八年七月二十一日、および七月二十五日の条。
- ㉕ 註⑭に同じ。
- ㉖ Du Halde, *Description*, tome, 4, p. 6.
- ㉗ 三人の宣教師は北京に到着するやごなや、十一月十日（陽曆十二月十日）に再び直隸の測量に出発したとあるので、かれらが北京に帰ったのは、その直前であろう。Du Halde, *Description*, tome, 1, préface, p. 31.

第三章 レジスのエゾ研究

エゾの問題に関連して、レジスが沿海地方で行なった調査は、主に二点あった。第一は、天体観測と三角測量を行ない、沿海地方の周辺で四十一度ないし四十三度の地点を搜索したことである。当時本州の北端は、北緯四十度ないしは四十二度付近にあると推定されたので、エゾの南端はそれよりも少し北に位置するはずである。このとき調査隊が実施した測定のもようは、レジスが手記の中に書き残している。たとえば豆満江の河口付近では、かれらは次のような作業を行なった。

かれらをタルタル人から分けるトゥメン^{II}ウラ（豆満江）は、ホンチュン（フンチュン）から十リウのところ東の大洋に注ぐ。

その地点は重要であつたので、われわれは海岸に近い高い丘まで四十三里の基礎を引かせた。その丘からは、すでに先の測定より位置を定めた町のふたつを見ることができ、またトゥメン^{II}ウラの河口を識別した。したがってタルタリア側の朝鮮王国の正確な国境を知りたいときは、われわれの地図を信頼してよい。^①

これは三角測量を行なう上で基準となる基線を、豆満江の河口と近くの丘との間に引いたことをいうと考えられる。また天体観測に関しては、

この地方の大きな森林は東海の岸に進むにつれて、さらに頻繁にかつ深くなる。それによつて寒気は、保たれる。われわれは、そのひとつを横切るのに九日を要した。また太陽の子午線の高度を測定するのに十分なスペースを作るために、仕方なく満洲人の兵に何本かの木を払わせたのであつた。

と述べる。これは、レジスが途中に通過した森の中での作業を記したものである。^②

一方でレジスは科学的な観測とともに、目視による地形の確認も行なった。たとえば南側で海洋に注ぐ豆満江やスイフン川の河口に注目して、その場所を自分の目で確かめている。^③これはユーラシア大陸の海岸線がどこにあるのか、そしてその沖合に陸地の影がみえるどうかを確認するためであつたと考えられる。

沿海地方においてイエズス会士たちは、目標の緯度を目指して前進したが、仮にその地点に到達できたとしても、かれらにはそこがエゾかどうかを決定することはできなかった。エゾの地形については、ほとんど不明であったからである。そこで第二の調査が、重要となる。実はレジスが沿海地方をエゾかどうか決定する上で、最終的な決め手としたのは、エゾの先住民であるアイヌ民族が、そこに居住するかどうかということであった。レジスによると、アイヌ民族の特色は次のようであるという。

身体に毛があつて、口ひげは胸までたれさがり、剣の先を頭の背後で結わえたとても恐ろしい人びと^④

レジスのアイヌに関する知識は、フロイスにもとづくが、かれは類似の特色をもつ民族が、沿海地方周辺に住んでいないか、各少数民族の生活習慣を細かく観察して、アイヌとの比較研究を行なった。

ところで十七世紀末から十八世紀初めにかけて、アムール川の中流地方では大規模な民族移住が断続的に起こり、住民は西の方へ移動を開始していた。レジスが調査を行なった一七〇九年は、ちょうどその中間過程にあつて^⑤いた。十八世紀前後にこの地域に住んだ民族の生活様式やその特徴を記録した資料は、中国においてもほとんど残っていない。そうした中で住民の状況を客観的に記述したかれの手記は、民族誌としても白眉の存在である。レジスはアムールの中流地方に起こつていた変動について、正確な知識をもつてはいなかったが、それによりかれの結論が、誤りに導かれることはなかった。

さてイエズス会士が現地に到着したときに、かれらは問題の北緯四十一度から四十三度までの範囲は、大部分が朝鮮の領内に含まれることを発見した。これは、予想外の事態であつた。この場合に朝鮮領内の土地が、エゾでないことはいふまでもない。そこでレジスは、朝鮮との国境付近を集中的に調べることにした。レジスがエゾではないかと期待したのは、北緯四十三度付近に位置するフンチュンであつた。その時期フンチュンの周辺には、クルカ韃子が居住していた。かれらはクヤラとも呼ばれ、もとは沿海地方の南部に居住していた。当時のクルカは、生活の基礎を海洋性動物の狩猟に置いて

いたが、康熙九年（一六七〇）に八旗に編入されて、フンチュンに移住してからは、満洲人と接触するうち満洲人との同化が進んで、生活や言語の上ではほとんど満洲人と区別できなくなっていた。^⑧ レジスはクルカ韃子の現状を観察して、かれらはアイヌとは無関係であると断定したのである。^⑦

続いてレジスは、沿海地方の一部とウスリ川の両岸を占めた住民に注目する。かれは、それを魚皮韃子と呼んでいる。この名称はリツチに始まり、マルチニにもみられるので、おそらく中国の文献から出たのであろう。十八世紀初頭にこの地域に居住したのは、グファティンなどの八氏族で、清の文献には八姓と現われる。^⑧ 魚皮韃子の名称は、その生活様式に由来する。レジスによると、かれらの生産活動は、もりや網を使用する漁撈が主で、日常の生活は、漁獲物に全面的に依存していた。かれらは魚を常食としており、魚の油はランプの燃料に利用し、皮はなめて衣服に作った。さらにその言語は、隣接する満洲人とケチエン韃子の言語の中間的な特徴をもっていた。^⑨ こうした生活習慣の特色から、レジスは魚皮韃子もアイヌではないと考えた。

レジスは、アムール川の下流沿岸に居住したケチエン韃子（ヘジエ）とファイアタ（フィヤカ）や、同じく中流沿岸にいた三姓について記しているが、その居住地はエゾの予想位置より大きく北に偏っているので、かれらがアイヌ民族にあたるとは考えていない。そのためにその記述は、魚皮韃子に比べてかんたんである。ここではいずれも省略する。

調査隊が出会った住民は、これで全部である。これらの民族はみなアイヌではなかったが、それでもなおレジスは、調査から漏れた民族が他に存在するのではないかと考えた。かれはあちこちを狩猟して回る魚皮韃子とケチエン韃子に、アイヌについて尋ねたが、かれらはその存在を否定したという。^⑩

こうしてレジスは、アイヌは沿海地方には居住しないと結論したのである。そして次の如きいう。

しかしわれわれは、確信をもつていうことができる。中国の地理学者が、エゾ^⑪地方はとても広大な領域をもち、東タラリアの一部であり、好戦的で日本人（和人）に恐れられる民族が住むというとき、そのエゾ地方ほど信じがたいものはない。という

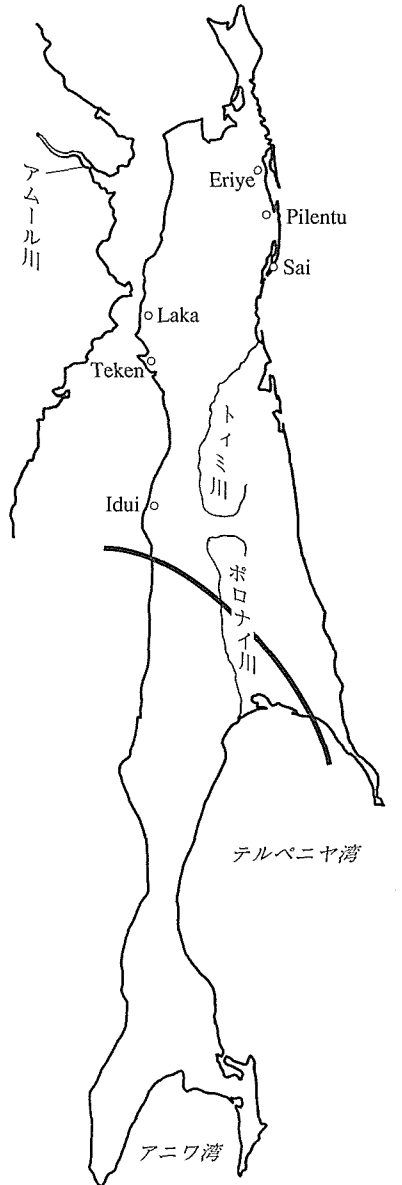
のはわれわれが、幾つかの河川の河口を測定して、数地点の位置を定めた海岸に関して、すでに述べたことの他に、魚皮韃子とケチエン韃子の満洲人が、身体に毛があつて、口ひげが胸までたれさがり、剣の先を頭の背後で結わえたとても恐ろしい人びとを知らないということが、いったいあるだろうか。かれらは土地が隣接し、また黒貂を狩猟する期間には、しばしばかれらの住居の東西にあるすべての土地を北緯五十五度付近までかけずり回るのである。地理学者によると、その地方は少なくとも四十三度付近、つまりホンチユンの周辺から始まっているはずだが、われわれはそこで少数のクルカ韃子しか見なかった。われわれがすでに指摘したように、かれらは現在、言語においても礼儀作法においても満洲人と区別がつかない。^⑩

沿海地方の調査を通じて、レジスはエゾが大陸、とくに沿海地方の一部であるという仮説を誤りであると考えるようになった。それを裏づける証拠を発見できなかったからである。しかし調査隊が到達した地点は沿海地方の南部までで、東海岸とその沖合の海洋については、未調査のまま残った。もしかするとエゾは、この方面に存在する可能性があるが、それに関連してレジスは、途中に立ち寄ったドンドン村で耳寄りな情報を得た。レジスは、

かれらはまっさきにわれわれに、サガリアンウラ河口の向かいに、かれらに似た人びとが暮らす大きな島があることを教えた。われわれは、そのことを知らなかった。

と伝える。^⑪ この大きな島が、現在のサハリンをさすことはまちがいないが、ただ調査以前にレジスたちが、その存在を知らなかったというのは、不可解である。ネルチンスク条約を締結した直後の康熙二十九年（一六九〇）に、清がアムール川左岸の各地に調査隊を派遣して、ロシアとの国境線を確認したおりに、吉林副都統バルダの率いる一隊は、すでに北サハリンに足跡を印しており、そのことは北京にいたイエズス会士にも伝わっていたはずである。^⑫ いずれにしてもサハリンの調査は、当初の計画には入っていなかったのである。

沿海地方の南部にエゾを発見できなかったレジスにとつて、アムール川の河口対岸に大きな島が存在するという情報は、とても魅力的であつたにちがいない。しかしこのときかれらは、アムール川の河口近くに行くことはできなかった。レジ



—以南がサハリンアイヌの居住地域（間宮林蔵による）
 ○『満漢合璧清内府一統輿地秘図』にみえる村落
 サハリンの略図

スハサハリンの調査を熱望したであろうが、その後も各地で測量を続けたので、かれ自らがサハリンを調査する機会は、ついにめぐってこなかった。

そこで康熙帝は二年後の五十年（一七二二）に、イエズス会士にかわり満洲人の調査隊を派遣した。『三姓副都統衙門檔案』第六冊、乾隆八年二月二十九日の条には、このときの調査に関して次のように述べる。

四十九年には聖祖の勅命により派遣された班領サルチャ（サルチャン）、二等侍衛ダブシエオ、ムダル、セフエンゲ、藍翎カバイたちが、オルチョのものに従えるときに、わたしイブゲネをオルチョ語を理解できると推挙して連れていったときに、わたしイブゲネは一度通訳の仕事を行ないました。

イブゲネは三姓の驍騎校で、この檔案は、かれが身体が不自由になったとして、免職を求めたときに述べた経歴の一部である。オルチョとは、サハリンの住民ウイルタのことである。この中でイブゲネは、サルチャンらの調査を四十九年とす

るが、それはかれの記憶ちがいであろう。というのは『寧古塔副都統衙門檔案』によると、このときサルチャンらは八十六戸の住民を従えたが、それは康熙五十年であったことがわかっている。^⑭ 一方でこの八十六戸が清に最初に貢納したのは、五十一年であるので、この場合はかれらは五十年に従属して、翌年初めて貢納したと理解するのが、合理的である。従属してから貢納するまでに二年も経過することは、ふつうは考えられないからである。

ところで班領や侍衛の官職から明らかなくとも、サルチャンらは康熙帝の近くで仕えていた。そのような人物をサハリンの調査隊と断定することには、異論があるかもしれないが、当時はこうしたことが、一般に行なわれていた。康熙帝は自らも数学・天文学を学んだが、一方では学問の素養があるものを選抜して、かれらにも数学・天文学を研究させた。^⑮ その中には康熙帝の側近くに仕えて、侍衛の地位にあったものも少なくない。^⑯ 帝はそれらの人物を派遣して、各地を測定させたのである。なおデュアルドの『中国誌』では、康熙帝がアムール川河口の島を調査させるために、満洲人を派遣したというだけで、かれらの素性を明らかにしないが、一七二二年に中国に入ったイエズス会士のゴービルは、サハリンに派遣された満洲人たちは、測量と羅針方位の訓練を受けた人物であったと記している。^⑰

満洲人たちが実施した調査の内容に関しては、レジスの手記に詳しい。最初にかれらは、島の名称について調べたが、その島はエゾという名前ではなかった。

それは大陸の人びとにより、かれらが常々行く島の異なる村に従って、さまざまに呼ばれるが、それにふさわしい一般的な名前は、サガリアン＝アンガ＝ハタ、すなわち黒龍江の河口にある島であろう。かれらが一致してそれを示すのは、その表現によつてであるからである。北京の何人かがほめかしたフイエという名称は、大陸のタルタル人も、島の住民もまったく知らない。^⑱

サガリアン＝アンガ＝ハタ (Sagaliyan ula i angga hada) は、今日いうところのサハリンの語源である。なお中国ではサハリンのことを庫頁島と呼ぶが、これはフイエ(ないしはクイエ)から出ている。しかし満洲人の調査によると、フイエの名は現地では知られていないという。

次にサルチャンらは、サハリンの位置を測定する。

その後皇帝はそこへ満洲人を派遣したが、かれらは海岸に住んでいて、島の西部の住民と交流のあるケチエン韃子の小舟に乗って行った。これらの諸君が東に行つて、それから北側を通つて出発した地点まで戻つたときに行なつたように、もしもかれらが南部を踏破して同様に測定したならば、われわれはこの島について、完全な知識をもつことができたであろう。しかしかれらはわれわれに、村落の名も南方の範囲も持ち帰らなかつた。したがつてわれわれが南部の図を描いたのは、何人かの住民の報告と、もし島がもつと長ければ、陸地があるはずだが、五十一度を越えると海岸沿いにはいかなる陸地も見えないということに基づいている。^⑩

調査隊はアムール川河口からサハリンの西海岸に到着して、それから東に向かい、その後北岸伝いに出発地まで戻つたと考えられる。かれらが、東海岸と西海岸のそれぞれどのあたりまで到達したのか、レジスの手記には明らかではないが、少なくとも北緯五十一度以南には及ばなかつたらしい。

満洲人の行なつた調査の成果は、康熙五十七年（一七一八）に完成した『皇輿全覽図』のサハリン図となつた。現存する『皇輿全覽図』系の諸地図に描かれるサハリンは、いずれも同様に「く」の字型をしており、大体北緯五十度から五十四度までを占める。真実のサハリンは、北緯四十六度付近から五十四度付近までに位置しているので、清代のサハリン図は、その北半分を描いたにすぎない。ここでそのひとつ『滿漢合璧清内府一統輿地秘図』のサハリン図を例にとると、全部で二十八の地名が記されており、このうち西海岸の地名はほぼ特定でき、その経緯度も大体正確である。その最南端はイドウイ（ラツチシ）とプルンガイで、北緯五十一度付近である。これに対して東海岸の地名は、北緯五十三度を境に南北で精度に差がある。北緯五十三度付近のヌリイエ川以北の地名は、大体特定することができるが、ただその緯度は、実際よりも一度くらい北に偏っている。一方ヌリイエ川より南の地名はかなり問題があり、本来であれば五十二度付近に現われるはずのサハリン第二の大河トイミ川も、その姿を見ることはできない。

一般にサハリンの地形は、北部の平原地域と中部以南の山岳地域に大別できる。北部地方は、全体がほぼなだらかな平

原状をしているのに対して、他方中・南部は千メートル級の山脈が南北に二列連なり、とくに西側の山脈は海岸近くまで迫っている。南北ふたつの地域を分ける境界は、大体北緯五十一度三十分の線であって、西海岸ではイドウイがその境となっている。『滴漢合璧清内府二統輿地秘図』のサハリン図と現実の地形とを重ね合わせると、サルチャンたちが踏査した範囲は、ほぼ北部の平地部分に限られることがわかる。

以上の推定は、文献によっても確かめられる。『寧古塔副都統衙門檔案』第二九冊、雍正十二年正月二十六日の条によると、

五十一年四月に將軍衙門から送つた文書に、……（戸部は）班領サルチャンたちが行つて新たに從えたクイエ、テメイエン、カダイエ、ソムニン、ディヤンチャン、ワルル、チョリル、ナムシレ、シユルングル、ハイフレ氏族など八十六戸から取つた八十六枚の税の貂皮を内務府に納めた……。

という。クイエ以下の氏族の居住地は、寧古塔副都統衙門が作成した辺民の貢納簿に明らかである。それによるとディヤンチャン氏族は、西テケン村に居住したが、このテケン、西海岸にあつたテケン（テッカ、ノテト）のことである。またワルル氏族の住む東西のサロロンチョン村は、現在のチャイオ、地図のサイ村にあたる。なおシユルングル氏族の一部は、東海岸の中央部、クタンギ（コタンケシ）村に住んでいたアイヌであるが、ここでいうシユルングルは、それとは別のグループと考えられる。おそらくサハリンの北部に居住したグループであろう。残る氏族も、みな北サハリンの集団とみていい。このようにサルチャンたちは、南部の山岳地域に足を踏み入れることはなかつたので、サハリンの南端は約五十一度であると報告したのである。

最後にサルチャンたちは、サハリンの先住民を調査した。民族の分布からいうと、サハリンの北半分は、ニヴフ族とワイルタ族が占めており、アイヌは南部にしか居住しない。前述した氏族のうち、ディヤンチャン氏族はニヴフとみられ、ワイルタ族はワイルタと考えられる。また間宮林蔵の調査によると、西海岸では北緯五十度付近のキトウシから南が、ア

イヌの居住地で、それから五十一度のイドウイまでは、ニヅフとアイヌの雑居地域であった。一方東海岸では、シー、タライカ以南がアイヌの居住地で、それより北にはウイルタが住んでいたという。^② 上述の如く満洲人の調査隊は、北緯五十一度付近までしか踏査しなかつたので、かれらはアイヌと接触する機会を失なつてしまつた。

サルチャンらの調査結果を聞いたレジスは、サハリンの民族について次の如く述べる。

そこに派遣された満洲人は、かれらが通過した村落の名を知つただけで、かれらがそれを願つたというよりは、むしろ便利が悪くて戻らねばならなかつた。かれらは、これらの島民は馬も他の駄獣も飼つていないが、しかしいくつかの土地では、そりをひく飼い馴らされた鹿の一種を所有するという。かれらが描いた絵によると、それはノルウエーで使役されるものに似ている。^③ ……

これが、サハリンの住民についての唯一の情報である。トナカイを飼養していたことから明らかに、この住民はウイルタである。

サルチャンらが調査した以上の三点を総合して、レジスはサハリンはエゾではないと断定したのである。

一七〇九年と一一年に行なつた調査の結論として、レジスは最後に次の如くまとめる。

それゆえに中国人の著者がエツェン、*Eszen*で理解したものが、われわれがエゾ「*Esso*」の名で知っているものかどうかを、これ以上検証することはやめて、かれらが大陸のこの部分とその住民について述べたことは、みな現実ではなく、そしてエゾ「*Esso*」島に関しては日本からの報告が、われわれに教えることに止めるべきであることを知れば、十分である。エゾは日本にかなり近く、五〇人の殉教者のなかまの責任者として、一六二三年に江戸で殺された有名なジェローム・デーアンジェリス神父に助けられた何人かの日本人キリスト教徒が、そこに逃げたからである。^④

このようにレジスは、エゾの問題に關しては、日本の情報が優先することを認めて、自らの結論もそれに預けた。そこでかれの作つた『皇輿全覽図』には、エゾの影は一切現われぬ。なお後にレジスらの資料はフランスに送られ、地図製作者ダンヴィルがそれを参考にして、『中国誌』のために多くの中国地図を製作した。そのうちの一枚東部ユーラシア地図

に、ダンヴィルは二島のエゾを描いているが、これはダンヴィル自身の構想にもとづいており、レジスとは無関係である。

- ① Du Halde, *Description*, tome, 4, p. 9.
- ② Du Halde, *Description*, tome, 4, p. 7.
- ③ Du Halde, *Description*, tome, 4, p. 9, 10. 本稿第二章九三頁と第三章九八頁を参照。
- ④ Du Halde, *Description*, tome, 4, p. 13.
- ⑤ 拙稿「康熙前半におけるクヤラ・新滿洲佐領の移住」(『東洋史研究』第四十八巻第四号、一九九〇年) および「一八世紀のアムール川中流地方における民族の交替」(『東洋学報』第七十九巻第三号、一九九七年)を参照。
- ⑥ 拙稿「康熙前半におけるクヤラ・新滿洲佐領の移住」七六、八一頁 および董万崙「清代庫雅喇滿洲研究」(『民族研究』一九八七年第四期)一〇〇—一〇二頁を参照。
- ⑦ Du Halde, *Description*, tome, 4, pp. 9, 13. 本稿第三章一〇一頁を参照。
- ⑧ 拙稿「一八世紀のアムール川中流地方における民族の交替」二二—一六頁を参照。
- ⑨ Du Halde, *Description*, tome, 4, pp. 10—12.
- ⑩ Du Halde, *Description*, tome, 4, p. 13. 本稿第三章の以下の文を参照。
- ⑪ Du Halde, *Description*, tome, 4, p. 13.
- ⑫ Du Halde, *Description*, tome, 4, p. 12.
- ⑬ 拙稿「ネルナンヌク条約直後清朝のアムール川左岸調査」(『史料』第八十巻第五号、一九九七年)九三—九五頁を参照。
- ⑭ 『寧古塔副都統衙門檔案』第二九冊、雍正十二年八月十九日の条。
- ⑮ 『寧古塔副都統衙門檔案』第二九冊、雍正十二年正月二十六日の条、および『大清會典』(雍正)卷一〇六礼部・繪賜。
- ⑯ 馮宝琳「康熙《皇輿全覽圖》的測繪考略」(『故宮博物院院刊』一九八五年第一期)二八、二九頁を参照。
- ⑰ 一例をあげると、康熙五十二年に朝鮮を測量するために派遣された阿斉図も、侍衛であった。『同文策考』(補編)卷九。
- ⑱ H. Cordier (ed.), *De la situation du Japon et de la Corée. Manuscrit inédit du Pere A. Gaubil S. J., Young Pao* 9, 1898, p. 106.
- ⑲ Du Halde, *Description*, tome, 4, pp. 12—13.
- ⑳ Du Halde, *Description*, tome, 4, p. 12.
- ㉑ 拙稿「十八世紀末アムール川下流地方の辺民組織」(『人文学科論集』(鹿兒島大学法文学部)第三十四号、一九九一年)表1を参照。
- ㉒ 拙稿「間宮林蔵の著作から見たアムール川最下流域地方の辺民組織」(神田信夫先生古稀記念論集編纂委員会編『清朝と東アジア』(山川出版社、一九九二年)一五七頁を参照。
- ㉓ 間宮林蔵『北夷分界余話』卷七—九。本稿では洞富雄・谷澤尚一編注『東隄地方紀行』(平凡社、一九八八年)をテキストに用いた。
- ㉔ Du Halde, *Description*, tom. 4, p. 13.
- ㉕ Du Halde, *Description*, tom. 4, p. 13.

イエズス会士たちが一七〇九年に敢行した沿海地方の調査は、エゾ研究における転換点となった。この調査を担当したレジスらは、途中多大な辛酸をなめながら、当時エゾではないかと想像されていた沿海地方に達して、その位置を観測し住民の生活文化を調査した。このときレジスらは、アムール河口の島（サハリン）を調査することはできなかったが、後にかれらに代わって満洲人の調査隊が、その調査を行なった。レジスらの調査は、エゾの実地調査としては、一六四三年のフリースの航海に続き、大陸側から行なったものとしては、世界初である。しかしレジスらは、沿海地方でもアムール河口の島でもアイヌと会うことはできず、どちらもエゾではないと結論した。結局のところレジスは、エゾ問題を解決することはできなかったが、エゾは日本に近い島であると確信した。またこのときに測量をしてえられた資料にもとづいて、レジスはユーラシア東部の海岸線とサハリン北部の形状を明らかにしたのである。

レジスの調査報告とその地図は、デュアルドの『中国誌』を通してヨーロッパに伝えられたが、その反響は大きく、それを境にして十七世紀にくりかえし現われた、エゾを大陸の一部とする説は消滅して、エゾは島であるという見解が、一般に認められるようになった。さらにレジスが描いたユーラシア大陸東部の海岸線とサハリンの形状も、多くの地図で採用されることになった。

エゾをめぐる論争は、十八世紀には舞台をヨーロッパに移して続いていく。その過程でまた、多数の人びとが論争に加わったが、しかしいずれの説も、実地調査を伴わない机上の推論でしかなかった。結局エゾ問題の解決は、十八世紀末のラペルーズとプロートンの実地調査まで待つほかはなかった。

Jesuit Father Regis's Investigation into the Maritime Province in 1709.

by

MATSUURA Shigeru

In 1709 Emperor Kangxi of the Qing dynasty dispatched an investigating commission, which included such Jesuit Fathers as Regis, in order to draw new maps of the Amur district. The party went through the Northeastern district to the town of Ningguta and then they went around the Maritime Province and left for the lower reaches of Amur river. Because they spent much time and it became colder, they could not advance toward the mouth and turned back.

I think that the party expressly went into the Maritime Province in order to solve the Yezo problem which was disputed in Europe. In those days some people thought that the Yezo district was part of the Eurasian Continent. Others thought it an island, but both people supposed similarly that it lied to the northeast in the direction of Korea, or north in the direction of the main island of Japan. Therefore Father Regis planned to go to the Maritime Province to investigate firsthand whether it was the Yezo district. As he could not confirm the existence of the Ainu people in this investigation, he concluded that the Maritime Province was not Yezo, and that Yezo was an island near Japan.

His investigation became a turning point of the research into the Yezo problem, since then people came to accept the hypothesis that Yezo was an island.

Die Probleme der Eisenbahnen und Bürgertum in der rheinischen
Stadt Köln in der Mitte des 19. Jahrhunderts

von

TANAHASHI Nobuaki

In der bisherigen geschichtlichen Forschung des deutschen Bürgertums sind zu allererst "Kompromisse" des rheinischen Bürgertums als Vertreter der Klasseninteressen der Bourgeoisie mit den preußischen konservativen Mächte